本校における防災教育の充実に向けた取組について
―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

35　安曇野市立明北小学校

１　はじめに

本校は、児童数 112 名の市内で一番小規模な学校である。安曇野市内の北東に位置し、校舎の裏側にはかんだち山、校舎から 200 メートルほど離れた位置に犀川が流れている。自然環境が豊かな地域であるが、校舎の東は土砂災害警戒区域（急傾斜）に指定されており、ひとたび地震や豪雨に見舞われると、土砂崩れや河川氾濫などの危険に見舞われることが予想される。本校の体育館は災害時指定避難所になっており、昨年度豪雨の際、夜間に一度実際に避難所として開放したことがある。また、職員の多くは明科地区以外の安曇野市内から通勤してきているため、明科駅のおよそ南西にある「松本盆地東断層」がずれて国道 19 号線が陥没したり犀川橋が崩壊したりした場合、職員が自宅から学校までたどり着けないことも予想される。

２　学校防災組織

<table>
<tr><th>係</th><th>職　員</th><th colspan="2">任　　務</th></tr>
<tr><td>防火管理者</td><td>校長</td><td colspan="2">安曇野市立明北小学校「消防計画」による</td></tr>
<tr><td>防火責任者</td><td>教頭</td><td colspan="2">安曇野市立明北小学校「消防計画」による</td></tr>
<tr><td rowspan="3">本　　部</td><td>隊長:校長</td><td>消防活動の最高責任者</td><td rowspan="2">・組織編制、全般の指揮、統率
・施設整備、本部設置、警報、指令
・外部への連絡、対応</td></tr>
<tr><td>副隊長:教頭</td><td>隊長の補佐、助言、代行</td></tr>
<tr><td>連絡係:（事務）</td><td>隊長、副隊長の指示を受け行動</td><td>・外部（消防署等）への連絡
・本部旗の持ち出し・職員人数確認</td></tr>
<tr><td>本部付
統括責任者</td><td>教頭</td><td colspan="2">・隊長の命令を職員へ伝達し各係の状況を隊長へ報告する。
・児童の避難や職員の避難誘導並びに警備、児童統括、消火、搬出、救護等の各係の指揮をとる。
・校内に異常を知らせ、情報を流し、消防機関等へ連絡する。</td></tr>
<tr><td>避難誘導
第一次行動</td><td>各学級担任
（８名）</td><td colspan="2">・避難口や経路の解放、避難経路の確認、器具の設定等を行う。
・児童を安全な場所へ避難誘導し、人員確認後本部へ連絡する。</td></tr>
</table>

児童統括 第二次行動	○係主任	・避難後の児童の安全確保に努め、全体を統括する。 ・出席簿を保管する。
警備 第二次行動	○１名 支援員（２名）	・第二次行動の際に、校舎内の状況や防火扉を点検する。 ・本部の指示で、不明児童の捜索と避難誘導を行う。
消火 第三次行動	○男性職員 （庁務）	・消火器やバケツ、砂、消火栓使用による二次消火（補助の消火）を行う。 ・消火誘導や水利確保、電源切断等の危険回避を図る。
搬出 第三次行動	○１名 庁務・市事務	・非常持ち出し物の明示、火災時の搬出・管理を行う。 ・本部の指示に従い、重要書類や備品の搬出を行う。
救護 第二・三次行動	○養護教諭 図書館司書	・救護所を設置し、負傷者の手当てを行う。 ・救護に必要な器具や設備の点検を行う。
管理点検者		・危険物の管理や消火器・用具・設備の点検を行う。

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1)　昨年度（１年目）の取組

本校では昨年度より「防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業」を活用して防災教育を進めてきており、本年度は２年目の取組となる。昨年９月 27 日に緊急地震速報受信システムを取り付けていただき、児童に説明したあと、抜き打ちでシェイクアウト訓練を授業中や休み時間などに複数回行った。学級に１枚ずつ振り返りカードを配布して、放送が流れた時どこに退避したのか、なぜそこに退避したのか、困ったことは何かなどを記入させた。また清掃中の避難訓練を行い、その後防災アドバイザーの廣内先生より児童に向けて「いざという時のために何ができるのか？」というテーマで講演をしていただいた。また、１月には約１時間職員に向けて学校防災に関する研修会を行っていただいた。廣内先生からは児童に対して緊急時における身の守り方を具体的に教えていただき、職員にはあらゆることを想定して対応をすることの大切さを教えていただいた。

(2)　本年度の取組

①　打合せ（８月 25 日）

年間予定に計画されている 11 月２日（木）の第２回避難訓練にきていただき、ご指導いただくことになったため、当日の流れに沿って打合せを行った。昨年度も清掃時における地震の避難訓練についてご指導いただいているため、昨年度より目標を明確にした訓練を実施するようにというご指導をいただいた。そのため、今年の地震を想定した２回目の避難訓練は、「特別教室にいるときどのように身を守ったらいいか」を各学級で考えてもらうことにした。児童には＜表１＞のような「地震から身を守ろう」というプリントを配布し、地震が来たときどんなことが危険か、どうすれば安全に身をまもれるかをその教室に行って考えさせ、それぞれに記入させた。学級によってはまとめて掲示した（＜表２＞）。

また、昨年度から作成し、本年度見直しをしている本校の災害対策計画を見ていた

だき、避難所開設については日頃から地域の方々とよく連携を図っておき、避難所も地域の方々の手による運営に任せ、学校は要請があったときのみお手伝いをすること、授業再開に向けたマニュアルが必要であることをご指導いただいた。

② 避難訓練の実施とアドバイス・児童（希望する保護者向け）講演会（11 月２日）

清掃終了５分前に緊急地震速報受信システムを利用しての避難訓練を実施した。また、その後児童と希望する保護者に防災に関する講演会を行っていただいた。保護者の参加は２名のみであり、やや残念であった。

【避難訓練についての廣内先生のご指導】

・ 北校舎２階を見ていた。ゴミ箱を持ってウロウロしている子、しゃがんでいたがガラスの近くにいた子、立っていて先生に注意されている子等が数名いたが、概ねきちんと身を守る行動がとれていた。

・ 先生方がトイレの中を確認していたのがよかった。実際の場合には掃除ロッカーなどに入り込む子もいるので、<u>チェックが終わったところの戸に、チョークで〇をつけておく</u>と行方不明者が出た時の手掛かりになる。チョークならすぐに消せるので、今度練習のときにやってみるといい。

〇 高学年の子が、雑巾を持って避難しようとしていた低学年の子に雑巾を置いていくよう声をかけたり、教え合って避難したりする様子が見られ、とてもよい避難訓練だった。

【廣内先生の講演会についての職員の感想】

・ 子ども達も地震津波などの恐ろしさが分かったと思う。実際に災害が起こった時、臨機応変に動けるためにも、訓練や日頃の心がけが大切だと感じた。

・ 災害の時のために、自分で日頃から考えておくことの大切さがよく伝わった。

・ 「釜石の奇蹟」は何度聞いても凄いことだと思った。

・ 昨年度の話に松川中の話と熊本地震の話が加わっていた。昨年度の事も思い出せたのが良かった。

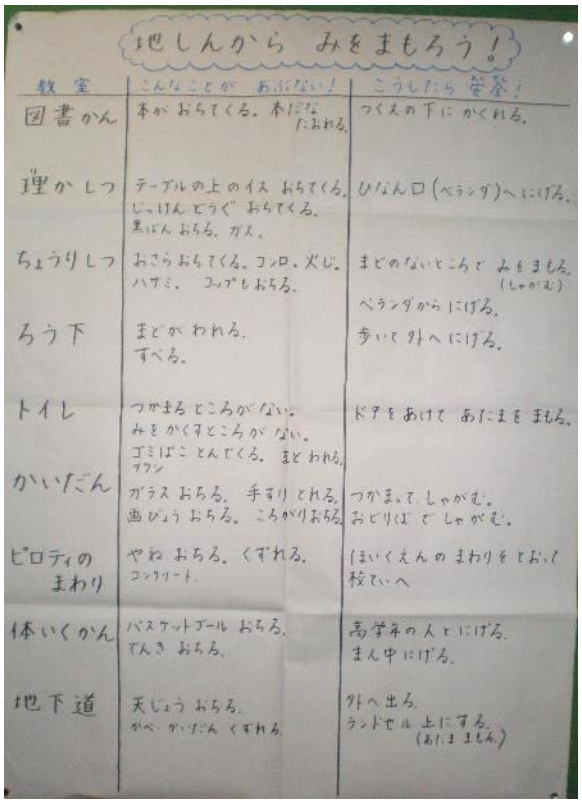
＜表１＞

地震から身を守ろう！

（２）年 名前

教室	こんなことがあぶない！	こうしたら安全！
(例) 音楽室	・たながたおれる。 ・ピアノがうごく。	・「おちてくるもの」、「うごいてくるもの」、「たおれてくるもの」からはなれる。
図書館	・たなから、本がおちてくる。	つくえの下に、かくれて
	・いすがうごく	おちてくるものからはなれる。
理科室	・たなから、ものがおちる	つくえの下に、かくれて
	・もけいがたおれる。	たおれてくるものからはなれる。
調理室	・たなから、おさらやコップが、われる。	ベランダの下に、かくれて おちてくるものからはなれる。
ろう下	まどが、われる。 でんきがわれる。	まどが、ないところにはなれる。
トイレ	ガラスが、われる。	トイレのドアをあけてあたまをおさえる
階段	まどが、われる ポスターがはがれる	かべのてすりにつかまる
ピロティのまわり	やねがおちる。	ほいくえんのほうをとおって、こうていにげる
体育館	でんきが、われる。	入口のほうで、あたまをまもる。
地下道	トンネルのかべがたおれる。	かいだんをのぼってにげる。

＜表２＞



地しんから みをまもろう！

教室	こんなことが あぶない！	こうしたら 安全！
図書かん	本が おちてくる。本だなたおれる。	つくえの下に かくれる。
理かしつ	テーブルの上のイス おちてくる。 じっけんどうぐ おちてくる。 黒ばん おちる。ガス。	ひなん口（ベランダ）へにげる。
ちょうりしつ	おさら おちてくる。コンロ。火じ。 ハサミ。 コップもおちる。	まどのないところで みをまもる。（しゃがむ） ベランダから にげる。
ろう下	まどが われる。 すべる。	歩いて外へにげる。
トイレ	つかまるところがない。 みをかくすところがない。 ゴミばこ とんでくる。まど われる。	ドアをあけて あたまを まもる。
かいだん	ガラス おちる。手すり とれる。 画びょう おちる。ころがりおちる。	つかまって しゃがむ。 おどりば で しゃがむ。
ピロティのまわり	やね おちる。くずれる。 コンクリート。	ほいくえんの まわりをとおって 校ていへ
体いくかん	バスケットゴール おちる。 でんき おちる。	高学年の人とにげる。 まん中にげる。
地下道	天じょう おちる。 かべ。かいだん くずれる。	外へ出る。 ランドセル 上にする。（あたま まもる）

【児童の避難訓練の感想】

（１年）地震のことをよく知らなかったけど、地震のことを教えてもらってよく分かった。

（１年）窓ガラスがわれる音がこわかった。

（１年）地震だと思ってびっくりしたけど、後から落ち着いて避難できた。

（２年）そうじの途中になったからびっくりした。でも放送をちゃんと聞いて行動できてよかった。

（３年）自分の身は自分で守ると思った。そして今日は机にもぐるときにうまく入れなかった。次からはちゃんとしたい。

（４年）いつくるかわかんないから、もし本当に起こった場合は訓練のときより素早く移動したい。体育館での話もためになった。

（５年）１年生など低学年に声をかけて避難できてよかった。今度はガラスから離れて身を守るようにしたい。

（６年）いきなり放送がなり、実際にきたのかと思い一瞬動けなかったが、避難する友だちを見て避難することができた。けれど、途中走ってしまった。

（６年）今日避難訓練があるとは思わなかったので頭が少し混乱したけど、少し考えて適切な行動をとることができて良かった。

４　事業の成果及び今後の課題

(1)　成果

実際にその場に行ってみたりプリントに記入したりすることによって、特別教室での身の守り方がその学年なりに理解できた。また、昨年度から引き続き、授業時間以外にも緊急地震受信システムを使っての避難訓練を複数回行っているので、落ち着いて避難できるようになってきている。今年度中に何度か短時間のシェイクアウト訓練を行う予定である。

廣内先生のアドバイスをいただき、本校の災害対策計画の見直しができた。

(2)　今後の課題

放送機器が使えない場合の避難訓練については早いうちに１度行いたい。また、明科地区３校での合同の引き渡し訓練は実施したが、こども園とも連携した引き渡し訓練を行いたいと考えている。登下校中の地震、夜間や休日の地震などに備え、地域と連携しての避難訓練の方法についても考えていかなければいけないと考える。

５　まとめ

あと３年で本事業が完了するので、地域と連携した防災計画について計画的に考えていきたい。

（　文責　教頭　河合ちほえ　）

実践的安全教育総合支援事業の取組について
―　実効ある訓練とマニュアルと職員の意識　―

36　安曇野市立明南小学校

１　はじめに

本校は、糸魚川－静岡構造線の外縁に位置し、内陸型地震の発生確率が極めて高い場所に立地している。そのために、より実効的な避難訓練が要求され、児童一人一人が「自分の身は自分で守る」意識を育てることが急務である。そこで、昨年度より「緊急地震速報受信システム」を導入し、防災アドバイザーによる指導を受けている。今年は児童のみならず教職員の防災意識の変革を図る２年目となった。

２　引き渡し訓練

本校の所在する安曇野市明科地区は、本校を含む小学校２校と中学校１校があり、明科中学校が、本校に隣接している上に、道路が狭いという地理的条件もあり、実戦的な引き渡し訓練を行うのであれば、３校が合同で実施する必要がある。

明南小学校の運動場は、自動車の通行可能な出入り口が一カ所しかない。そこで引き渡し訓練を行うのは、中学校の運動場を活用することにした。ただし、雨天の場合は、運動場の使用が困難であるため、雨天案についても準備した。

以下は、その訓練の計画と反省である。

(1) 日　　時

５月 16 日（火）14：30～16：00（各校引き渡し開始 14：50～）

５・６校時・放課後　（雨でも実施。駐車場は雲龍寺と明科体育館の駐車場を利用）

(2) 想定内容　学校からの訓練メール　14：30 発信

件名「（訓練）大規模地震発生による児童生徒引き渡し実施」

訓練、訓練。本日５月 17 日 14：00、松本市南部を震源とした大規模地震が発生しました。安曇野市での震度は５強。学校での学習活動は困難な状況です。

そこで、明科中学校、明北小学校、明南小学校では、14：50 から児童生徒の引き渡しを行います。各校へは 14：45 以降に学校周辺の誘導に従い、来校いただきますようお願いします。

※保護者には、学区内が震度５以上であれば引き渡しを実施ことを事前周知済み

担　任　・　児　童	保　護　者
14：30～14：40　帰りの会 ・教室にて帰りの会を行い、担任から引き渡しの方法について聞く。 ・特別支援学級の児童は 14：30 までに原学級へ移動する。 14：40　一時避難所（体育館）への移動 ・「保護者に引き渡しをしますので、体育館に移	14：45 以降　来校開始 ・学校へ来校。自動車を使う家庭は、中学校校庭へ駐車する。徒歩は直接小学校体育館へ。 ・中学校に兄弟関係がある保護者は、中学生から引き取る。

動してください。」の放送を聞き、移動を開始する。
・並び方は、裏面図参照。
14：50　引き取り開始
・立ち歩かず、自分のクラスの場所で待つ。大きな声を出したりしないように指導する。
15：35～15：45　引き渡し状況確認
・各学級担任は、引き渡しカードを使って、クラスで残っている児童の数を確認する。
・確認後、職員室の教頭先生へ報告をする。
15：45　残留児童の避難・帰宅
・どうしても時間内に引き取りに来られない児童については、学級担任が保護者に連絡をとり、児童を体育館でみている。
・今回は「残留児童はいない」という想定の下での訓練だが、緊急事態に備えて、その時間も設定しておく。
・教頭は、明科中、明北小からの連絡を待ち、児童生徒全員の引き渡し完了を確認後、訓練終了の連絡を本校と他校に通達する。

・中学校校庭駐車場からは、安全面を配慮し、中学校の正門とグリーンベルトを通り、小学校に入る。
14：50　引き取り開始
・保護者は、体育館の社会体育用入口から、ビニール袋（学校配布）に下足を入れ、体育館へ入場。14：50 前には開場しない。
・兄弟があれば、低学年の児童から引き取りをしてもらう。
・中学生の兄弟は、下足をビニール袋に入れ、小学校の体育館に入り、保護者と一緒に行動する。

手順①　引き取る人は、担任の前で児童の氏名と児童との関係、避難先を告知。
手順②　担任は児童を呼ぶ。
手順③　担任は、カードで間柄・時刻・避難先を確認し、名簿にチェックする。
手順④　担任は、確認作業後、引き取る人に児童を引き渡す。

(5) そ の 他

①激しい雨が降り、駐車場を変更する場合は、前日の 17:00 頃か当日の９:00 頃に判断を行う。３校教頭同士で連絡を取り合い、オクレンジャーを各校配信する。

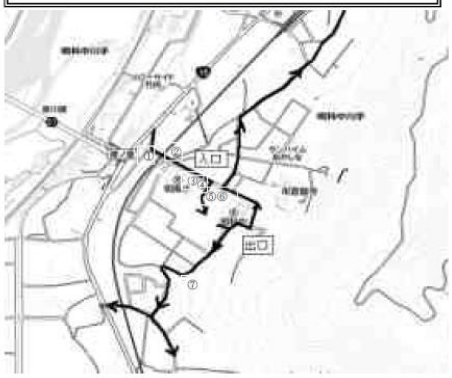
②車で来校する保護者は、安全の為、中学校正門と明科体育館と明科中体育館の間のグリーンベルトを歩き、小学校の体育館に移動する。車に戻る場合も、同様のコースで駐車場へ行く。車と歩行者の事故が起きないように、担当職員は的確に指示を出す。

③体育館床面保護のため、保護者に下足用のビニール袋（学校購入）を当日に配布する。児童は下足用のビニール袋を事前に用意するように、各家庭に連絡する。

④実際の地震を想定し、保護者には、なるべく自宅や職場からオクレンジャーを受信してから出発するように呼びかけた。

⑤雨天の場合は、駐車場が満車になる可能性があるのでなるべく徒歩で来校するように保護者に事前の連絡をする。

明科地区三校合同引き渡し訓練　自家用車経路図



※前項の地図のように、車の進入経路を示し、一方通行にすることで混乱を緩和する。

(6) 反省から

① 児童はきびきびと動けていてよかった。保護者も静かに参加した。
②メールを受けてから動くことを連絡したので、14:30 前に車は１台のみだった。
③最後の児童を引き渡すまでにかかった時間は 45 分である。
④PTA 役員の方が車の誘導など手伝ってくださって本当にありがたかった。

４　避難訓練

(1) 目　　的　　①緊急地震速報の音に慣れ、反射的に行動できるようになる。
　　②訓練内容をより有効なものにするために課題を見つける。

(2) 実施日時　　平成 29 年７月６日（木）業間（午前 10 時 30 分～）
　　（事前練習５日（水）８：25 に緊急地震速報の音を流す初動訓練。）

(3) 想　　定

７月６日（木）午前 10 時 30 分、牛伏寺断層を震源とする大型の地震の兆候が観測され、気象庁より緊急地震速報が発表された。午前 10 時 30 分 10 秒、大型の地震が発生し、明科地区においても震度５強を記録。この地震により、安曇野市内では建物等が倒壊し負傷者も発生している状況。大型の余震発生が予想され、校舎倒壊や火災発生の危険があることから校舎外への避難を決定する。

(4) 事前指導（学年や学級の実態に応じて、訓練の効果が上がるように行う）

①地震及び火災の恐ろしさ

②避難経路と避難場所、危険箇所の確認

③地震から身を守る方法　　＊実際に予行演習をさせる。

教室内…すばやく机の下に隠れ、机の脚を掴み、頭部を守る。

教室以外…「倒れてこない・落ちてこない・動かない」場所を探して退避する。

(5) そ の 他

なお、訓練の計画書には、以下のことが記されている。

【実際に地震が起きた場合】

①校庭への一次避難が完了された後、体育館の安全を確認。使用可能であれば体育館へ二次避難をおこなう。

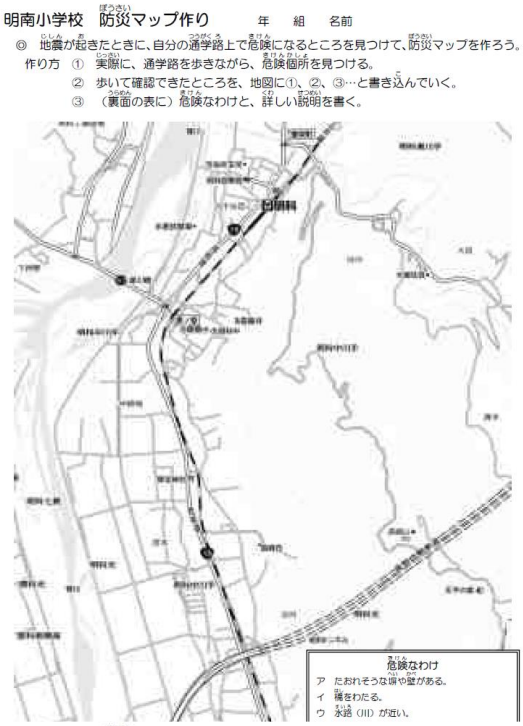
②保護者への引き渡し（震度５以上の場合は無条件でおこなう　※保護者に周知）

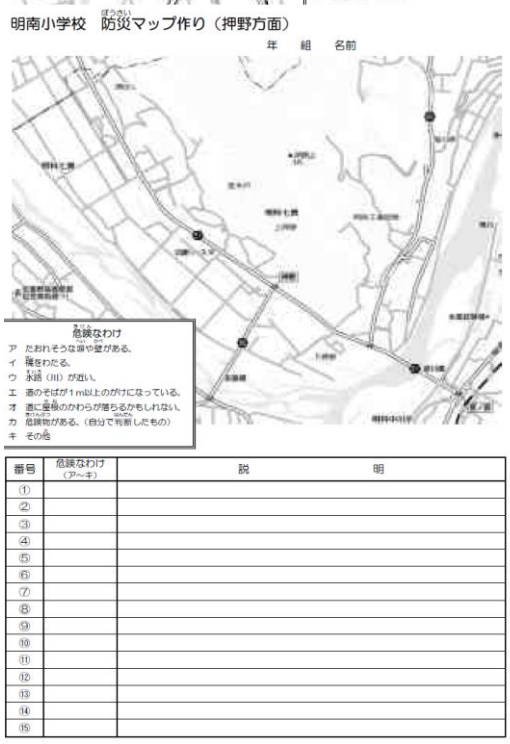
・オクレンジャーによる連絡　　・交通整理

③帰宅困難児童への対応（救護係が担当）・学級担任が、保護者に連絡を取る。

５　職員研修

11 月 28 日(火)16：00 から、防災アドバイザー廣内先生を講師に実践的安全教育について職員研修会を開催した。本校の地震発生に関する自然地理・地質学的な立地を解説いただいた。糸魚川－静岡構造線断層帯の活断層が本校の目と鼻の先を通っていることを、再認識させていただき、地震発生時における教職員に求められる臨機応変な判断による、より実戦的な対応を、東日本大震災や福岡県朝倉市の豪雨災害によって孤立した小学校などの事例。さらに、熊本地震から、避難所となった学校の授業再開までのプロセスを、時系列に沿って学校による対応の違いから解説をいただいた。これらの講話から、私たち学校職員は、日頃から地域住民と顔の見えるつきあいをしていくことを心がけることで、学校職員だけが苦労する避難所の運営ではいけない、地域と協力した運営をしていくことで、授業再開が早まる。また、子どもたちや教職員の心のケアを据えた学校の再開に向けた計画を立てていくことが必要であることを学ぶことができた。





番号	危険なわけ（ア～キ）	説　　明
①		
②		
③		
④		
⑤		
⑥		
⑦		
⑧		
⑨		
⑩		
⑪		
⑫		
⑬		
⑭		
⑮		

６　防災マップ作り

児童の目で見て、児童が主体の防災マップ作りにしていく。５・６年児童に先のようなプリントを配布し、個別に危険箇所をチェックしていった。その地図には、以下のような記述がある。

「地震が起きたときに、自分の通学路上で危険になるところを見つけて、防災マップを作ろう。（①実際に、通学路を歩きながら、危険個所を見つける。②歩いて確認できたところを、地図に１、２、３…と書き込んでいく。③（裏面の表に）危険なわけと、詳しい説明を書く。）そして、観点は、以下のア～キに集約した。【ア　たおれそうな塀や壁がある。イ　橋をわたる。ウ　水路（川）が近い。エ　道のそばが１m以上のがけになっている。オ　道に屋根のかわらが落ちるかもしれない。カ　危険物がある。（自分で判断したもの）キ　その他】その調査結果を地区児童会で集約し、各地区の防災マップにした。

７　まとめ

昨年度はＤＩＧ訓練のように、教職員はいかに動き、どう考えるのかを学ぶ機会を設定し、防災に関する職員の意識改革に努めた。そして本年度・事業の２年目として、危機管理マニュアルの見直しに着手し、より実効あるものに変革するように努力した。警報システム装置が鳴動すれば教室で担任がガラスの飛散防止のためにカーテンをいち早くしめる。児童は先生の指示を待たずに退避行動をとる。どの場所にいても、自らのできうる最善の行動をとる姿勢が増えてきた。

しかし、職員の意識を「実践的」で「実効ある」訓練を積み重ね、動ける集団として継続していくためには、年度が変わったところで、引き継ぎを、書類上だけにとどまらない、全職員が理念の理解を継続していく必要があるだろう。さらに、来年度は、防災に関わる、児童の心のケアに着眼していきたいと考える。

（　文責　教頭　矢口高士　）

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について
― 緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練の実施と迅速かつ確実な人員確認を目指して ―

37　安曇野市立堀金中学校

１　はじめに

本校は、北アルプスの南東の扇状地に開けた安曇野市の堀金地区に位置している。旧堀金村の誕生時に２校が統合され開校したのち、平成 17（2005）年の町村合併により、旧堀金村立から安曇野市立に移行した。また、平成 28 年には開校 70 周年を迎え、記念事業も行われた。現在の学校規模は 14 学級（うち特別支援学級は４学級）で、生徒数は 297 名、職員数は 36 名である。ここ 10 数年ほどは、松本市のベッドタウンとして住宅数も増加したが、ＪＲ大糸線の最寄駅から３㎞あまり離れていて、今後は減少傾向にある。

安曇野市が作成したハザードマップによると、本校は土砂災害警戒区域や浸水想定区域からも離れ、安全と思われる場所に立地し、指定避難所にもなっている。開校以来、大きな災害や震災には見舞われていないが、最近は温暖化の影響か突発的な大雨や大雪が降ることが多くなっている。さらには、市内東部を南北に貫く糸魚川－静岡構造線（推定位置は本校から直線距離で約５㎞）が走り、震度７クラスの大地震が起きる可能性は非常に高い地域である。それらに対処するために、昨年度には「実践的安全教育総合支援事業」の指定を受けて、「緊急地震速報受信システム」を導入した。学校防災アドバイザーとして、信州大学教育学部の廣内大助教授に指導をお願いして、助言をいただきながらの実践的な訓練を重ねていくことで、いざという時に自ら判断して行動できる生徒の育成を目指した取り組みを進めている。

２　本校の防護団組織について

係名	おもな係員	任務
本部	校長 教頭 教務主任 防災係	・状況把握、判断及び警報発令、職員への指示・伝達等 ・対外機関・関係者への連絡（教育委員会・警察／消防署　他） ・非常持ち出し袋の管理
通報	事務職員 他	・生徒や関係機関への連絡
避 難 誘 導	各学年主任 他	・生徒の安全誘導→本部への集結→人員点呼・報告等 ・校内残留者の確認～指示等 ・二次避難時の生徒の安全誘導

消 火	年次ごとに 変更	・可能な範囲での初期消火活動等（消火器、消火ポンプを利用） ・電源、ガス等の確認及び遮断
搬 出	年次ごとに 変更	・非常持ち出し品等の搬出及び確認 （重要書類及び物件の搬出→非常持ち出しと明記）
救護	養護 他	・救護場所の設置、負傷者の救護・応急処置等 ・医師、医療機関等への連絡及び必要な依頼や医師への補助
警備	年次ごとに 変更	・搬出物の管理
学校施設 安全確認 （地震時）	その都度、 教頭が指名	・震災後の校舎施設安全確認 （ガラス・壁・天井・落下物・つり下がり物等） ・危険箇所や損壊場所への立ち入り禁止表示設置 ・ガス・電気関係の閉鎖と安全確認

３　避難訓練等の実施について

避難訓練では実際に起きうる場面を想定して、今年度は２回の避難訓練やショート訓練、生徒の集団下校訓練を行った。

○　地震時には、まず避難の可否判断のために校舎の破損状況を確認する。避難が可能と判断し、生徒たちが学校内に散らばっている状態（清掃時）から、放送を聞き各自の判断による避難を実施する。

○　人員確認は担任に知らせずに、何名かの生徒が行方不明の状況を設定し訓練を実施する。担任は学級生徒の集合した現在人数、不明生徒数とその氏名の迅速かつ的確な報告の方法を確認する。

(1)　第１回避難訓練

①　実施日　４月 13 日（木）第６校時

②　訓練の目的・重点

ア　新しい学級や場所からの避難経路の確認

イ　防護団活動の確認

③　訓練の概要

ア　訓練の意義や避難経路を事前に各学級で指導

イ　通報訓練

ウ　避難指示（火災の想定）と避難

エ　生徒と職員の人員確認

オ　防護団活動（係活動の確認）

カ　ご指導（松本広域消防局安曇野消防署員）

(2)　緊急地震速報のショート訓練

①　実施日　５月 10 日（水）帰りの会

②　訓練の目的・重点

ア　１年生は緊急地震速報を聞くことが初めてなので、担任指導のもと速やかに机の下にもぐる行動をとる。

イ　２・３年生は緊急地震速報による訓練を昨年経験済みなので、日時を連絡せずに訓練を行う。

(3)　全校集団下校訓練

①　実施日　５月 15 日（月）　下校時

②　訓練の目的・重点

ア　災害時や不審者対策などのために、地区ごとに集合する。

イ　地区担当の職員による引率のもと集団下校をする。

③　訓練の概要

ア　体育館に集合し、学級ごとの人員確認後に、地区ごとに生徒数の確認をする。

イ　地区担当職員付き添いのもと、各地区の公民館まで集団下校をする。

(4)　第２回避難訓練（緊急地震速報システムを利用した訓練）

①　実施日　11 月 21 日（火）清掃時

②　訓練の目的・重点

ア　その場・その時での緊急地震速報が流れた時に身を守る方法を確認する

イ　校舎内の安全確認と避難の可否判断の迅速な方法を確認する

ウ　放送を聞き、自己判断による避難行動

エ　集合した生徒数や行方不明生徒数とその氏名の迅速かつ的確な報告

③　訓練の概要

ア　生徒は机の下にもぐって身を守り待機する

イ　校舎の破損状況の確認と避難の可否判断

ウ　放送内容を聞き取り、清掃場所からの自己判断による避難

エ　行方不明生徒の人数と氏名及び職員の人員確認

オ　ご指導（防災アドバイザー廣内教授から）

カ　緊急地震速報のしくみ（各自に気象庁発行のリーフレットを配布）の指導と各自の反省

４　学校防災アドバイザーとの関わり

昨年度に引き続き、アドバイザーの廣内教授と安曇野市教育委員会の宮川主査に来校いただき、次のようなアドバイスをいただいた。

(1)　事前打ち合わせ　　10 月 24 日（火）

①　第２回避難訓練の実施計画については、不明者がいるという想定で行うことを伝え、ハードルは高くなったが、実施後に反省を行い今後に生かしていくことを確認した。

②　職員側も緊張感を持った訓練を行う。

(2)　避難訓練当日　　11 月 21 日（火）

①　訓練全体の様子を見学後、生徒への講評をいただいた。その後、係職員への指導をいただいた。

②　次回および次年度以降の訓練の方向について助言をいただいた。

５　学校防災アドバイザーからいただいた改善点

(1) 生徒たちは緊急地震速報のアナウンスを黙って聞いていた。どう対応していいか分からない生徒やしゃがむのがやっとだったり、呆然と立ったままだったりした生徒が若干見受けられた。その場でしゃがむなどの行動をとるのではなく、ほかの場所や教室に移動する姿があった。そのように初動の動き（反射的な退避行動）ができなかったり、行動が遅かったりする生徒もいるので、短時間のショート訓練を実施して、速やかに退避行動をとることができるように、積み重ねていく必要がある。

(2) 生徒たちの動きは真面目であり、真剣であった。放送内容を聞き取って場所を考えて座る生徒もいて、ステップは進んでいる。

(3) 担任の先生方の取り組み方がよい。子どもたちはその真剣さを見て緊張してできていた。また、職員が最後の１人まで真剣に探すことが生徒たちにも伝わり、命の大切さが伝わる良い訓練となった。

６　事業の成果及び今後の課題

(1) 実践的安全教育総合支援事業の２年目であるが、地震速報受信システムを利用し、より実践的な訓練を実施できた。昨年度の訓練は、多くの時間生活しているホームルームで自席に座っている状態で行ったが、本年度は清掃時の実施でステップを進めることができた。

(2) 来年度は地域と連携し、被災時に中学生が地域の一員として地域防災の一助となろうとする意識を高めていく活動を行うことも計画している。

（　文責　教諭　富井光和　）

実践的安全教育総合支援事業５年目の実践について
―　４年目を迎えた子ども目線でのハザードマップづくりと緊急地震速報を用いた抜き打ち避難訓練　―

38　松川村立松川中学校

１　はじめに

本校は、安曇野の北部、米作の盛んな穀倉地帯である松川村の唯一の中学校で、生徒数 301 名、学級数 13 学級の中規模校である。通学区が広く、全校生徒の３分の１は自転車通学をしている。過去、昭和期に２回の水害による被害は出ているが、他に大規模な災害の経験はない村である。しかし、敷地のすぐ東を一級河川の高瀬川が流れているため、地震や集中豪雨により堤防が決壊した場合の避難行動は課題と考えている。

２　実践の経過

平成 24 年度の３年生は、「命を守るプロジェクト」をテーマに震　災や防災について取材や調査を重ね『防災新聞』と絵本『子どもたちからの贈りもの』　を発行し、村民の防災意識を高めた。

平成 25 年度に緊急地震速報受信システムが導入されてから、“緊急地震速報受信システムを利用した防災訓練”を実施している。支援事業２年目となる平成 26 年度は、学校防災教育アドバイザーである信州大学教育学部の廣内大助教授より、「管理防災の実践に加えて、防災教育に関する実践モデル校に」という要請を受けた。そこで１年生が、２学期の総合的な学習の時間を使って、『子ども目線でのハザードマップづくり』をテーマに、フィールドワーク、紙地図の作成、紙地図の電子データ化、発表会・展示会に積極的に取り組み１年目の活動をまとめる事ができた。

これらの経歴が認められて、平成 26 年７月には、「長野県学校安全表彰」を、平成 27 年 12 月には「文部科学大臣表彰・学校保健及び学校安全全国表彰」を受賞した。

平成 27 年度には、緊急地震速報受信システムを活用した２回の避難訓練を実施した。さらに、前年度１年生の活動を引き継ぐ形で、２年生４名と１年生７名の計 11 名によるクラブ活動「ハザマクラブ」を発足、前年度迄の調査データと本年度のデータを合わせてＡ３サイズ３面の情報紙面とマップを完成させ、村内全戸に配布した。

平成 28 年度は、引き続き緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練を実施した。表示や活動、指導の成果として、特別教室や廊下等での安全な場所の把握・一次避難時の的確な避難行動にも向上が見られた。また、「子ども目線でのハザートマップづくり」の３年目にあたり、３学年の総合的な学習の時間内で講座を開設した。平成 28～29 年度版「子ども目線でのハザードマップ」作成に向けた調査、取材、レイアウト、編集を行った。

３　緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練の実践

(1)　日時：平成 29 年９月８日（金)10:35～

(2)　ねらい：

①　火災・地震などによる災害に備え、日常の予備訓練を行い、生徒を迅速かつ安全に避難させるようにする。

②　災害に対する意識を高め、「自分の身は自分で守る心構え」と「沈着・機敏」の心情を育て、常に最善の避難行動ができるようにする。

(3)　流れ

①緊急地震速報システム音声 → ②一次避難指示 → ③二次避難指示伝令（放送機器の使用不能を想定）→ ④近くの出入口から校庭に避難 → ⑤クラス別に整列 → ⑥職員による点呼・巡視 → ⑦職員の避難確認 → ⑧訓練講評（松川村消防団青山団長）→ ⑨講演会（４(1)学校防災アドバイザー)

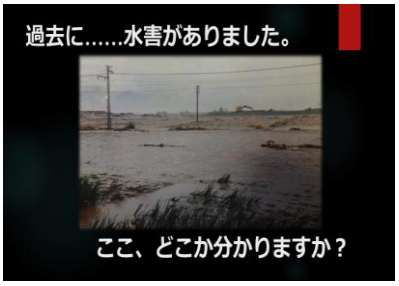
(4)　事後点検：反省用紙により全校が一次避難・二次避難と講演会を振り返る。

(5)　一次避難の総括

緊急地震速報受信システムを活用した避難訓練も４年目となり、一次避難の姿勢等、その場に適した行動を取る生徒の姿が見られた。一方で、「テストです」という音声によって訓練であることを認識しなかった生徒もいた。今後、テストであろうと無かろうと、緊急地震速報などの緊急事態を知らせる警報を耳にしたら条件反射で身の安全を確保したり緊張感を持ったりするよう、体にしみこませたい。また、職員についても、避難指示伝達や、職員自身の安全確保に課題が残った。生徒と共に、防災への意識を高めていきたい。

４　子ども目線でのハザートマップづくり（４年目）の実践

(1)　避難訓練に合わせた講演会での発表



ア　日　時：平成 29 年９月８日（金)避難訓練後

イ　演　題：「災害は遠い話ではない
～松川村と災害～」

ウ　目　的：松川村における水害の歴史や防災の現状について、過去３年間の活動をもとに発信し、災害を身近なものとして再認識し、自分の身は自分で守るという防災への意識を高める。

エ　講　師：廣内大助　教授（信州大学教育学部）
北沢賢悟　教諭（ハザマクラブ担当）
ハザマクラブメンバー　３学年生徒

オ　参加者：全校生徒 301 名、職員 30 名

カ　内容

平成 27 年度に調査し、平成 28 年度に全戸配布した「子ども目線でのハザードマップ」をもとに、松川村における水害の歴史や防災の現状について紹介し、考える時間とした。先に顧問の北沢が PowerPoint を用いて平成 28 年度版マップの紹介と、

過去の水害に関する講演を行った。それに続き、平成 27 年度の調査に参加したハザードマップクラブの３年生が、調査の際に感じたことや、防災について考えたことを発表した。

講演会の中で、避難場所について知っていることや、自宅における災害への備えなど、生徒相互に話し合う時間を取った。加えて、信州大学の廣内大助教授から、東日本大震災における釜石の奇跡を中心としたご講演をいただいた。講演会後の振り返りでは、「村での災害や、防災についてさらに知りたい」という記述が多く見られ、全校生徒の防災意識の向上につなげることができた。

(2)　１～３月の活動（未了）

平成 28～29 年度版紙面の編集作業。e コミマップ、Word、PowerPoint を用いて編集を進める。昨年度３年生の取組に加え、本年度の講演会発表の内容も踏まえ、避難所情報等の内容が充実した紙面を目指す。３月に村内全戸に配布予定。

５　学校防災アドバイザー等とのかかわり（信州大学廣内大助教授）

(1)　避難訓練と防災講演会の打ち合わせと御指導：８月８日（火）14:00～16:00

ア　参加者：教諭 北沢（ハザードマップ担当）、講師 万谷（防災担当）

イ　内容：翌月８日の避難訓練、並びに講演会に向けた助言と御指導。今後の「ハザード子ども目線でのハザードマップづくり」について懇談。

(2)　避難訓練と講演会：９月８日（金）10:00～12:00

ア　参加者：信州大学教育学部廣内教授、全校生徒 301 名、職員 30 名

イ　内容：本校で行われる緊急地震速報受信システムを用いた防災訓練に対する指導と、防災に関する講演。

６　今後の課題

(1)　避難について

昨年度の反省を活かして、緊急地震速報受信システムを用いて実践的な避難訓練を行った。さらに緊急地震速報の音声が流れた際の対応など、普段から意識付けを行っていく必要性が明らかになった。本事業における取組も５年目となり、当初の目的や意識を知る生徒はいなくなり、職員も多くが入れ代わった。今後、防災意識をいかにつなげていくかどうかが課題であり、今後予測される地震等の災害に対し、学校としていかに備えるかを、避難訓練等の形と理念の両面で引き継いでいきたい。

(2)　平成 28～29 年度版「子どもの目線によるハザードマップ」について

ア　本年度避難訓練時の発表も踏まえ、編集作業を完了し、本年３月の全戸配布をもって５年間の活動のまとめとする。

イ　来年度以降は上記紙面を学校に保存し、避難訓練等と合わせて防災意識の向上につなげていきたい。事業を終える中で、いかに成果と防災意識を引き継いでいくかが最大の課題である。　　（　文責　教諭　北沢賢悟　）

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について
― 緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練、小中合同引き渡し訓練の実施について ―

39　小谷村立小谷小学校

１　はじめに

小谷村は、長野県の北部に位置する人口３千名の山村である。かつては南小谷、中土、北小谷の３つの小学校があったが、過疎化による児童数減少に伴い平成 18 年に３校を統合して小谷小学校が誕生した。現在の児童数は 122 名で、すぐ近くに中学校と保育園も立地している環境をいかし保小中一貫型教育の展開を目指している。

２　本校の防災体制について

平成 26 年の神城断層地震で小谷村も大きな被害を受け、児童のなかには家が全壊し転居を余儀なくされた子もいる。一般的な小学校と同様に地震や火災を想定した避難訓練や引き渡し訓練を実施してきたが、今年初めて小中合同で引き渡し訓練を実施することにした。また、防災アドバイザーとの事前の打ち合わせでご助言いただいた学校と行政との懇談会を開催できないか役場の総務課と調整をはかってきた。

３　本年度の避難訓練

(1)　第１回避難訓練　　４月１３日（木）（火災を想定）

(2)　第２回避難訓練　　８月３０日（水）（休み時間の地震を想定）

避難訓練と合わせ、昨年度の反省をいかし防災アドバイザーから助言いただいた津波についての学習を行う。児童は津波の怖さが実感できたようだった。

(3)　引き渡し訓練　　１１月２２日（水）防災を考える日

(4)　第３回避難訓練　　１月１７日（水）（火災、雪で校庭に避難する場合を想定）

４　全国一斉情報伝達訓練への参加

(1)　全国一斉緊急地震速報訓練　　１１月　１日（水）

Ｊアラート（ミサイル発射）　１１月１４日（火）

※　その場で身を守るシェイクアウト訓練を実施

①姿勢を低くする　②体や頭を守る　③揺れが収まるまで動かない

(2)　児童に対する事前指導

大きな音を怖がる児童に対しては、事前に地震の効果音を聞かせ、教室での訓練に参加できるか確認した。

(3)　保護者への周知

運動会前にＪアラートが実際に流れ保護者から不安の声が寄せられた。そこで、保育園、中学校、村教育委員会と相談し、Ｊアラートが流れた場合のマニュアルを

配布し保護者の不安解消を図った。

５　学校防災アドバイザーの関わり

今年も信州大学の榊原先生にご指導いただいた。事前の打合せで学校と行政との懇談会を打診されたので役場総務課の消防主任と連携を図った。本年度初めて中学校と合同で引き渡し訓練を実施した。昇降口で待つ保護者の私語が気になったが、副会長が「訓練なのだから私語を謹んでください」と注意してくださり緊張感のある訓練が実施できた。

引き渡し訓練の実施後、学校（小学校：校長、教頭　中学校：教頭、防災主任)、村（総務課消防主任、教育委員会）で初めて懇談会を実施した。土砂災害防止法が改正され、小谷村は全村が対象地域なので学校が避難所として使えなくなったことを想定した避難訓練が必要だということが分かった。小学校が中学校に避難する、また、その時に保育園の児童の世話をしながら一緒に避難するといった防災教育の面でも保小中の連携が促進できそうである。

また、保護者への啓発を図るため参観日に防災教育を実施してほしいという助言もいただいた。たしかに神城断層地震から３年が経ち平穏な生活が当たり前になり緊迫感がなくなってきている。信州大学の学生が地震を風化させないように聞きとり調査をしてくれているので、大学との連携をさらに深め次の大きな地震に備えていきたい。

６　事業の成果及び今後の課題

土砂災害防止法という法律があり小谷村が全村指定されていることを知った。東日本大震災の時の「釜石の奇跡」を参考に、すぐ隣にある保育園の園児を小学校の高学年が世話をしながら一緒に避難できる態勢を構築したい。また、道路が寸断され帰宅できないことを想定し学校に泊まる訓練も必要との助言もあった。たしかに迂回路がない地区があるのでこの訓練は必要だと思われる。これからＰＴＡとの相談しながら夏休みに実施できないか考えていきたい。

７　まとめ

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の２年目が終わろうとしている。

小谷村は災害が多いところで、地震だけでなく水害や地滑りの災害も心配される。今年も大雨で７月４日に村内全域に避難準備情報が発令され体育館が避難所になった。幸いなことに避難された方はいなかったが、実際に避難所になった場合、今の非常用電源では冬期の暖房が使用出来ないという課題が分かったので、役場と相談しながら改善策を考えていきたい。

引き渡し訓練の様子

（　文責　教頭　石川敏幸　）

防災管理、防災教育の充実に向けた取組について
― ショート訓練・引き渡し訓練から ―

40　小谷村立小谷中学校

１　はじめに

本校は、平成 19 年度に耐震工事を行い９年目を迎えた。村内の中央を姫川が流れ、国道と鉄道は姫川沿いを走る。標高 579mに小谷中学校は位置する。小谷村は南北に長く、広い学区で、全校生徒 66 名の７割ほどが路線バスや村バスを利用しての通学となっている。また、冬期は雪が多く、一昨年度は国道で事故のためバスが運行できず休校になったこともあった。その他、熊の出没により、生徒の安全確保のため、徒歩通学生徒もバスを利用することもあった。また、小谷村での大きな自然災害は、近年では平成７年７月 11 日に起こった「７・11 梅雨前線豪雨災害」と平成 26 年 11 月 22 日に起こった「11・22 神城断層地震」である。この日を風化させないよう、毎年 11 月 22 日前後で『命や防災を考える日』を位置づけ、自分たちの防災に対する意識を高める活動を行っている。その中で、昨年緊急地震速報受信システムを設置していただき、このシステムを利用した避難訓練を計画的に実施している。

２　本校の防災体制について（概要）

(1)　防災管理

防護団組織（H29 の危機管理マニュアルより抜粋、主に火災、地震等）

係名	係職員氏名	主な仕事内容
本部	○団長：学校長 ○副団長：教頭（補佐）	・防火設備の管理 ・本部設定、全体統括、指揮、命令
通報・連絡係	○教頭 事務主任	・校内への警報伝達、消防署、警察署など関係機関へ連絡（ハンドマイク、校内放送）
避難誘導	○担任	・生徒の避難誘導、生徒の管理 ・避難場所変更の場合の誘導
搬出	○事務主任 図書館司書	・重要書類、重要物件の搬出（必要な場合）

消火	○環境整美係主任 校用技師	・消火器、消火栓を使って初期消火 ・電気、ガス、危険物などの安全装置点検
巡視	○防災係 副担任	・各分担区の巡視（１階、２階、３階、体育館） ・非常時の生徒・職員の誘導 ・避難できなかった生徒の捜索、避難誘導（救助の補助
救護	○養護教諭 副担任	・負傷者及び被救護者の応急手当と保護 ・緊急薬品の用意、医師・家庭との連絡 （担架、教護旗、救護位置決定）

(2)　防災教育

①『命や防災を考える日』の設定

ア　平成 26 年 11 月 22 日神城断層地震の日の前後に、命や防災を考える日を設定し、生徒の防災に対する意識を高めた。

イ　２年に１回、３・11 と 11・22 前後の日に、非常食を食べる体験を給食の時間に行っている。(小谷小・中学校)

②　家族で防災会議を開くためのプリントの活用

ア　安全係からＡ３版のプリント『家族で防災会議を開きましょう！』を命や防災を考える日を学級活動の時間に扱い、家庭で話し合うことを励行した。

(3)　避難訓練の状況

①　年間　４回の避難訓練（防犯訓練も含む）

ア　４月（火災）・９月（地震）・11 月（火災；消火器使用訓練）実施

イ　６月防犯訓練（不審者対応）実施

②　緊急地震速報受信システムを利用しての避難訓練

ア　緊急地震速報受診システムによるショート訓練（４月）

○　短学活で机の下に潜る。

イ　地震を想定した訓練で使用（９月）

○　震度は５弱、10 秒後に到達、机の下に潜り、グラウンドに避難する訓練を実施

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1)　平成 27 年度から信州大学学術研究院教育学部・教育学研究科教授理学博士の榊原保志教授から指導を受けている。(本年度３年目)

①　１年目は施設を見ていただき、防災計画等への指導助言を受けた。

②　２年目は緊急地震速報受信システム導入した避難訓練の実施についての指導助言を受けた。

(2)　本年度、実施し指導を受けたこと

①　緊急地震速報受信システムを利用してのショート訓練（前年度の指導から改善）

ア　全国一斉訓練（11/１緊急地震速報　11/14ミサイル発射Ｊアラート訓練）の前の訓練

○朝学活の時間（10/26）にシェイクアウト訓練（姿勢を低く、頭（体）を守り、動かない）を実施。全国一斉の訓練放送が入ることを指導した。

②　小学校で行っている引き渡し訓練を小中合同で実施（中学校引き渡し訓練の参観）

ア　実施日　平成29年11月22日（水）

イ　防災アドバイザー訓練参観　15：25～15：35

ウ　引き渡し訓練での指導・助言

○受付のチェック

…カードをもとに名簿作成、父・母のところに○印をつけるなど、短時間でチェックできることを検討するとよい。

○駐車場

…職員の車をグラウンド側に移動してから、今回の訓練をするなど、普段の状況から行うことも大切である。

○引き渡しの判断

…小中同じ歩調、地震の震度（５弱）、被害の状況から判断していく。被害状況によっては学校にとめおくこともある。

○引き渡しの順番

…小学校から中学校はよい。（低学年（弱者）からが原則）

○引き渡し訓練の目的

…どのような被害状況のため、○○を想定して引き渡しを小中一緒に行うことが大切である。（はっきり決めておくこと）

○カードの欄

…一次避難場所と二次避難場所はどこかを記入しておくとよい。（安否確認時に連絡がとりやすい。長期化したらどこへ行くか）

③　小中学校と村との懇談会

ア　実施日　平成29年11月22日（水）15：45～16：45小谷小学校

イ　参加者　防災アドバイザー（榊原保志教授）

小谷村役場 総務課庶務係消防防災担当者（１名）

小谷村教育委員会担当者（１名）

小谷小学校　校長・教頭（２名）

小谷中学校　校長・教頭（２名）

ウ　行政への指導・助言

○地滑りの指定あり（中学校）

…数年間の計画で砂防フェンスの設置を進める。

○合同避難訓練

…保小中、行政との合同避難訓練を行う必要である。

○備蓄用品等リスト

…どの施設に何があるか。施設の避難人数から判断して、備蓄用品の数を決める。

○地域の福祉施設への協力

…災害（地震、土砂災害等）は学校だけでなく地域全体で起こるので福祉施設にも依頼をする。

エ　今後の方向（訓練に関わって）

○本部からの指示

…各教室の被害状況報告を受けてから、避難等の判断を行うとよい。（本部から各教室に確認する指示）

○校内放送が使えない状況

…地震等による停電等で校内放送が使えないことを想定した訓練を行うとよい。

○防災教育の充実を図る

…マップを使って、自分の家、村内にいた時、自分の安全を確保するにはどうしたらよいか。授業参観日に防災の授業を行い、家庭でも考える機会をつくる。（地域の防災マップ、避難所場所の活用）

○災害時の職員の動き確認

…生徒・保護者の安否確認、通学路の安全確認、学校再開の準備等、マニュアルを作成しておくとよい。

○家庭の中で話し合う

…災害があったらどこに集合するか決めておく。（家庭内での防災意識を高めることを行っておく。）

○危機管理マニュアルの見直し等

…土砂災害等に係る法律の一部変更に伴い、危機管理マニュアルの見直し等、平成 33 年までに整備する。

○職員・生徒に周知すること（具体的にどうやって逃げるか）

…１階がだめなら２階へ移動、土砂流れ込んでいない反対側からというセオリー。

４　事業の成果及び今後の課題

(1)　事業の成果

① 緊急地震速報受信システムを利用しての避難訓練は、回数を重ねると緊急放送が通報された段階で一人ひとりが自らの判断で自分の身を守る姿勢に入れる等、生徒の対応が素早くできる。

② 年１回の割合で消防署からの指導を受けた避難訓練をしていたが、常に派遣できなくなったため、昨年度から実施している学校防災アドバイザーの指導は防災意識を高めるきっかけとなった。

(2)　今後の課題

① 避難訓練だけでなく、月ごとに緊急地震速報システムの活用したショート訓練、計画的な防災教育の実施、緊急時の避難態勢が、どの場所でも取れるようなシステムの有効活用について学校防災アドバイザーの指導をいただきながら進めたい。

② 休み時間、登下校時など、いろいろなケースで地震が起こった時の対応などを含めた防災教育の充実が課題である。

５　まとめ

生徒が「自分の命は自分で守る」「小谷村を支える一人として地域に協力する」「日頃から防災に対しての意識を高める」ための適切な行動ができるように、普段からの防災教育や避難訓練を進めていきたい。また、状況に応じて自分で判断し、安全な場所に自分で避難できるなど、具体的な場面を想定した訓練や家族と日頃から防災について話し合う機会をつくる訓練、村の行政と連携した避難訓練等を検討して実践していきたい。

（　文責　教頭　丸山伸一　）

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について
― 児童が自ら考え行動できる能力を養うための取組 ―

41　長野市立加茂小学校

１　はじめに

本校は、県都長野市の西部に位置し、善光寺の近くにある。学区は、幼稚園から大学まで、多くの学校がある長野市の文教地区となっている。また、茂菅や小田切のような山間地もあり、変化に富んだ広い学区を持っていて、202 名の児童が通ってきている。

２　本校の防災教育について

長野市の土砂災害ハザードマップを見ると、本小学校区の多くが土砂災害警戒区域または地滑り危険箇所に入っている。有事の際には、身の安全に気を付けなければならない地域で生活している。そこで、本校では、土砂災害ハザードマップにそれぞれの児童の家の位置を記した所在地マップを作成している。

また、現在の学校防災アドバイザーの指導の下、昨年度、信州大学と特定非営利活動法人 Dochubu が開発した防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップづくりの実践を行った。このソフトウェアは、タブレット端末と Web-GIS を連携させることで、防災情報収集を効率化し、限られた時間の中で児童が防災についての思考・判断をより深められ、かつ学年に応じた取組をサポートでき、協働的に防災マップを作成していけるものである。

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1) ソフトウェアの更新と本年度方針打ち合わせ　７月５日 17:00～19:00

① 参加者　DoChubu　落合鋭充　氏

② 内　容

タブレット端末内のデータと e コミマップ等の設定を昨年度実践のクラスから、今年度のクラスへ変更する必要があるため、更新作業をしていただくとともに、今年

度、実践する内容が、本ソフトウェアで可能であるかなど懇談。

(2) フィールドワーク当日来校　：９月９日 8:30～10:30

① 参加者　信州大学教育学部 廣内大助 教授、同学部学生８名

② 内　容

８つの班に分かれてフィールドワークを行うため、最中の交通安全面およびソフトウェアの操作等、児童の活動について円滑に行えるようにしていただいた。

(3) ソフトウェアについて（DoChubu　落合鋭充　氏）

フィールドワークで行ったデータが見えなくなるなど、不測の事態が起きるたびに電話やメールで、解決のために複数回のアドバイスをいただいた。

(4) 今年度の実践について（信州大学教育学部 廣内大助 教授）

今年度の実践を進めるにあたって、児童が自ら考え行動できる能力を養う取組について、メールにて複数回のアドバイスをいただいた。

４　活動状況

(1) 活動のテーマ・参加者

① テーマ　自宅で発災したときに避難所までの避難経路を考える

② 参加者　３学年児童 28 名

(2) 活動のきっかけと目的

子どもたちが、マップの中から自分たちの家を探し、その地図に書き込まれている線の意味を知ったときに、「いざというときに家から安全に小学校まで避難することができるのか確かめたい」という想いが高まった。

そこで、いざというとき、自宅から安全に避難することが本当にできるのかを考え、自宅から避難所である学校までのルートが本当に安全なのかどうかを確かめることを通して、一人一人が防災や安全への意識を高め、主体的に防災や安全について取り組む。

班ごとに調査活動

(3) 活動内容

①９月９日

野外活動で、大地震になったときに危険と感じた情報をタブレット端末に記録しながら収集していく。

調査後、班での話し合い

②９月 12 日

各班の調査データが統合された防災マップをみながら考察する。

③９月 14 日

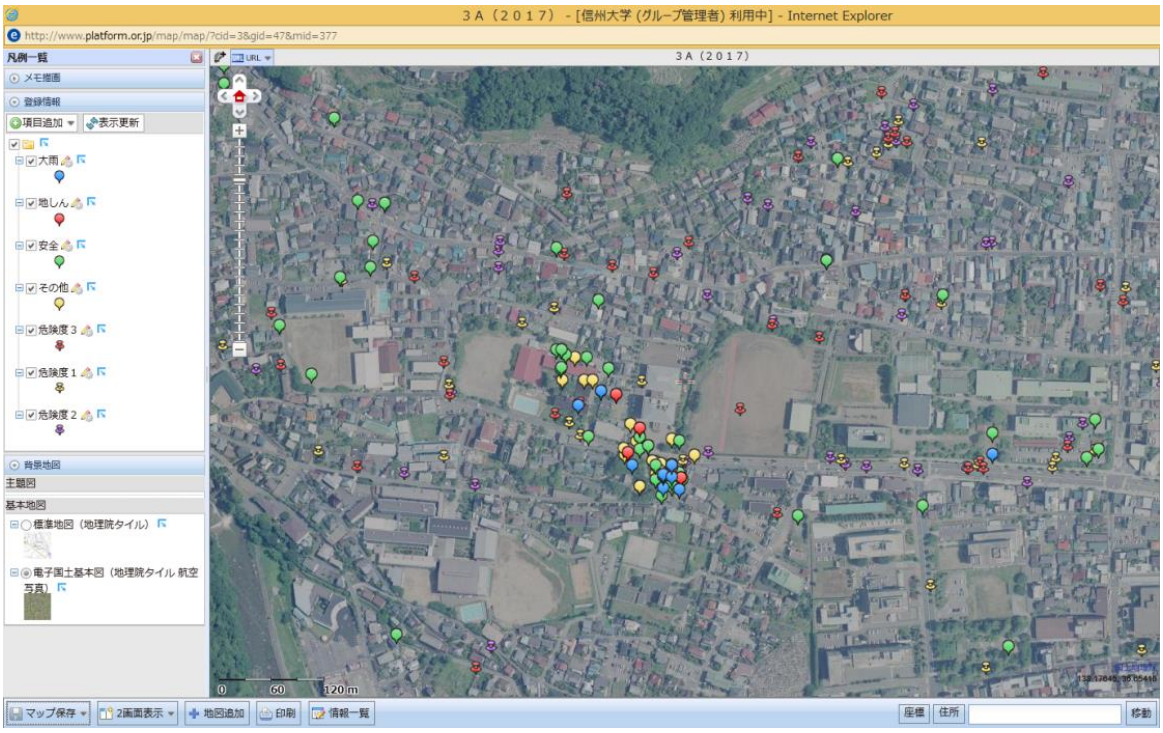
野外活動で、同じスタート地点からそれぞれの班が決めたルートを通り、避難所である小学校までの避難経路が安全に行けるか調査する。

④９月 20 日

各班の調査データが統合された防災マップをみながら、適切な避難ルートはどこなのかや、何に注意すべきなのか考える。

全体で発表

(4) 防災マップの様子



５　事業の成果及び今後の課題

(1) ICT（タブレット端末）と GIS（地理情報システム）を活用した防災学習の取組を実施することができた。

(2) 日常的に目にしてきた裏山や通学路などを防災の視点で見ることができた。

(3) 班での活動を全体に紹介する必要があるので、伝える力が向上した。

(4) タブレット端末を使った学習であったので、ICT 活用の力が向上した。

(5) タブレット端末にコメントを入力するので、習いたてのローマ字を習得する力やタイピングする力が向上した。

(6) 野外活動で自ら見て回り、実際に安全に避難できるのか考え合ったことで、自分たちの住む地区の安全について考えを深めることができた。

(7) 地域における防災活動も進められているが、地域と学校が連携するに至っていない。学校での防災教育を紹介するなど、できるところから進めていきたい。

６　本事業に関連した取組の発信

(1) 全国大会にて発表（日本教育工学協会 第42回全日本教育工学研究協議会）

① 平成28年10月15日

ア 参加者　藤井善章 教頭、野池徹哉 教諭、小松賢吾 教諭

イ 内　容　タブレット端末によるGISを用いた防災学習支援用ソフトウェアの開発

(2) 地域での実践発表（長野市教職員研修講座）

（廣内大助教授講義「大震災から学ぶ学校の防災管理、防災教育」において）

①平成29年７月14日

ア 発表者　藤井善章 教頭

イ 内　容　見つめ直そう私たち加茂地区の安全

(3) 県内での実践発表（日本教育工学協会「教育の情報化」実践セミナー2017in飯田）

①平成29年８月26日

ア 参加者　藤井善章 教頭

イ 内　容　GISを用いた防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップつくり

(4) 全国大会にて発表（日本教育工学会第33回全国大会）

①平成29年９月16日

ア 参加者　藤井善章 教頭

イ 内　容　小学生の防災マップ制作を支援するアクティブラーニング・ツールの実践検証

(5) 記事による実践報告（日本教育工学協会ニューズレターNo.121 (2017vol.3)に掲載）

①平成29年11月１日（発行）

ア 内　容　GISを用いた防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップつくり

（　文責　教頭　藤井善章　）